

氏 名 (国 籍)	ちゃん 張	どん ほ 東 浩 (韓 国)
学 位 の 種 類	博 士 (芸 術 学)	
学 位 記 番 号	博 甲 第 3250 号	
学位授与年月日	平成 15 年 3 月 25 日	
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当	
審 査 研 究 科	芸術学研究科	
学 位 論 文 題 目	韓国の近代における美術教育の変遷	
主 査	筑波大学助教授	博士 (芸術学) 岡 崎 昭 夫
副 査	筑波大学教授	博士 (芸術学) 五十殿 利 治
副 査	筑波大学助教授	博士 (芸術学) 守 屋 正 彦
副 査	筑波大学教授	博士 (美術) 金 子 一 夫

## 論 文 の 内 容 の 要 旨

本論文は、1895年の「甲午更張」(改革)に始まり、日本による朝鮮の保護時代(1905～1911年)を経て、1945年の日本の植民地(1911～1945年)からの解放に至る、近代韓国の学校教育における図画科と手工科の展開を、主に教育制度の推移、教科書の内容、教育雑誌への投稿記事という三種類の歴史資料の記述と分析に基づいて、時代的に区分することを目的としている。論文の序章では、研究の背景と目的、研究の対象と方法、及び研究のないよう構成が記述され、続いて近代韓国における美術教育の変遷が全7章にわたって論述され、終章では、本論文の各章が要約され、研究の成果とその意義が述べられている。

第1章「日本の韓国統治政策と近代学校の成立」では、古代から近代に至る朝鮮の略史を前提に、19世紀後半における朝鮮の内外の政治的、社会的状況を背景として、19世紀末の大韓帝国において近代的な学校が設立され、図画も教科の一つとして導入されたことが説明されている。日清・日露の両戦争の結果、日本による朝鮮の保護国化と植民地化が進行し、日本の韓国統治政策の一環として幾多の植民地教育政策(日本人の顧問政策による文明的教育、武断政策による帝国臣民教育、文化政策による内地延長主義教育、皇民化政策による皇民化教育)が、保護国期の統監府や植民地期の総督府によって、継続的に打ち出されたことが指摘されている。

第2章「朝鮮教育令の法規と学校制度の変遷」では、日本の天皇による勅令としての第一次朝鮮教育令から第四次朝鮮教育令までのそれぞれの教育令の法規が提示され、さらに、それらの教育令に基づいてなされた学校教育の制度的変化が図示されているが、これにより日本の植民地教育の目的と教育制度が明示されている。

第3章「保護時代(1905～1911年)における図画・手工教育」では、教育制度・教科書・投稿記事から、図画・手工教育の初期の展開が述べられている。図画科が「普通学校」(小学校)において必修教科の一つとして「本科」に設置され、韓国の最初の近代的な国定教科書として『図画臨本』四巻(1907～1908年)が発行されたことや、その教科書の原画を韓国人の画家の李道榮が日本の『毛筆画手本』を参考にして描いたことが、詳述されている。この時期における図画教育は臨画中心の教育として成立する一方で、手工教育は普通学校では「随意科」として加設してもよい教科の一つとなり、手工教育の導入の時代であったと著者はみなしている。

第4章「第一次朝鮮教育令期(1911～1922年)における図画・手工教育」では、図画科が普通学校では随意科に置かれて図画教育の基盤が変化したことが述べられている。さらに、学校教育の現場で勤務した教師たちの投稿記事から、1910年代には当時の学校教育の現場では主に臨画教育が教授されていたことが認められ、その臨画

教育は、1916年になると批判されはじめ、1920年代に入るとさらに教師たちの間で軽視されていたことも見出されている。著者によれば、1910年代における図画教育は臨画教育時代である一方、この時期の手工教育は、地方の材料をもち、郷土的製品を制作する教育内容であり、または職業人を養成するためのものであった。

第5章「第二次朝鮮教育令期（1922～1938年）における図画・手工教育」では、図画科が普通学校では再び本科に入れられた結果、1921年に韓国の生活文化の題材が多く組み込まれた『普通学校図画帖』の教科書が発行された事実が上げられている。教材構成からみれば相変わらず臨画が他の教材よりも多い教科書は、日本の文部省の『新定画帖』（1910年）の教科書の教育内容の構成を参考にしたものではあったとしても、絵画的な表現の題材に関しては『新定画帖』よりも発展した内容をもつものであったことが本論文によって実証されている。さらに、投稿記事の分析から、1920年代の図画教育では、臨画教育が衰退し、自由画教育が学校教育の現場に広まったが、1930年に入ると、自由画教育が自然描写の写生画と相違がなくなり、学校教育の現場では児童の生活に関する表現を求める「想画」が広まっていったという、図画教育の時代の推移が把握され、そうした傾向が『普通学校図画』（1937年）や『初等図画』（1938年）の教科書に反映されていることを図版で示している。手工教育に関しては、教師たちの投稿記事から見ると、郷土的製品を制作し、職業人を養成する教育内容であり、自由画教育の影響により教師たちの間では手工教育が非児童主義の教育として批判されたことが指摘されている。

第6章「第三次朝鮮教育令期（1938～1943年）における図画・手工教育」では、軍国主義の題材が多く見られる『初等図画』（1938年）と『尋常小学図画』（1939年）の教科書の教材構成は、低学年には思想画が、高学年には写生画が主な教材に組み込まれている特徴が見出されている。この時期の教科書は日本の文部省が発行した教科書『尋常小学図画』（1932年）の内容をそのまま複製したもので、韓国の生活文化と関わる題材が消滅している。しかもこの時代には図画教育に関する投稿記事は非常に少なく、教科書の教材構成からのみで言えることは、低学年には思想画が、高学年には写生画が多く組み込まれたので、「思想画・写生画教育の時代」であったと著者は見なしている。そして、手工科は満州事変という時代状況から、普通学校でも必須教科目として編成され、戦時体制に合わせて物品供給のための政策が行われたことが述べられている。

第7章「第四次朝鮮教育令期（1943～1945年）における図画・手工教育」では、『エノホン』（1942年）、『初等科図画』（1943～1944年）の教科書の内容構成に低学年には思想画が、高学年には写生画の教材が多く組み込まれた結果、この時期も第三次朝鮮教育令期の内容と同じく、図画教育は思想画・写生画教育の時代であり、『初等工作』（1943～1944年）の教科書においては、工作教育は戦時体制のための教育として重視され、物品供給のための制作と機械扱いに関する知識や技能の習得が中心の戦時体制としての手工教育であったことが記述されている。

終章では韓国の近代における美術教育の変遷に関する本研究の統括的見解が提示されている。植民地政治と教育政策の下で半自主的ではあったが、1920年代後半には韓国人の教師たちの間に美術教育の意識が確立して研究発表の活動が行われたこと、教科書の内容に韓国の生活文化などの題材が多く組み込まれたこと、そして『図画臨本』の教科書の原画を描いたのは韓国人の伝統が画家であり、その他の教科書の場合も韓国人の画家が描いた可能性が高いことなど、著者による独自の見解が示されている。

## 審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文は、近代韓国の美術教育の時代的変遷を、主に教育制度の推移、教科書の内容、教育雑誌への投稿記事という三種類の歴史資料に基づいて、可能な限り客観的に記述し、図画教育と手工教育の二つの分野における新たな時代区分の確定を試みたものである。韓国における先行研究は、戦前の図画教育を「臨画教育」（1907～1937）の時代と「思想画・写生画」（1937～1945）の時代に分けているが、本研究では「臨画教育時代」（1906～1920）、「自由画教育時代」（1920～1930）、「想画・写生画教育時代」（1930～1938）、「思想画・写生画教育時代」（1938～

1945) という新たな時代区分を提示し、そこに本論文の独自性を見せている。また韓国においては戦前の手工教育に関する時代区分は曖昧であったが、本研究では、導入期(1906～1909)、郷土品制作・職業人の養成(1909～1938)、実用品の政策・兵士養成(1938～1945)の三区分を明確にして提示している。

さらに「朝鮮教育会」発行の投稿記事に基づいて、1920年代から1930年代に至る時期に、日本の山本 鼎による「自由画」教育運動が移入され、韓国人教師の独自の美術教育への主体的な取り組みが発生し、臨画教育を脱して近代的な自己表現の美術教育の思潮が発生した事実を文献的に立証したことは、本論分の顕著な成果である。また韓国において作成された『図画臨本』(1907～1908年)、『普通学校図画帖』(1921)『普通学校図画』(1937年)や『初等図画』(1938年)の内容を示す図版を分析して、各時代の日本の教科書内容の移植、韓国独自の教材開発の付加、日本のものよりもより近代的な絵画の図版掲載などを解明したことは、本論分の新たな知見と見なすことができる。

本論文は、大部分の時期が日本の植民地下という特殊な状況下にあった関係から、本格的な研究が今日まで日韓双方において回避されてきた近代韓国における美術教育の変遷に関する包括的研究に真正面から取り組み、日本による植民地教育下の美術教育の制度・教科書・実践をきわめて詳細に解明し、韓国においても自国の美術教育の制度史観点に修正を迫った点で、日韓の美術教育史研究への多大の貢献と大きな意義が認められ、審査員一同の高い評価を得た。

よって、著者は博士(芸術学)の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。